

在日中国人の若者とエスニック・ネットワークの再考  
—温州レストランをベースとした在日中国温州人の若者のエスニック・ネットワークづくりの事例から—  
Rethinking Ethnic Network Building among Chinese Youth in Japan:  
A Case Study of Ethnic Networking based on Wenzhou Restaurant among Chinese Wenzhou Youth in Japan

閻美輪(東洋大学社会学部)

YAN MEILUN (Toyo University, Faculty of Sociology)

キーワード: 在日中国人、エスニック・ネットワーク、在日温州人の若者、温州レストラン

2020年6月時点で日本在住の外国人総数約286万人のうち、中国人は約79万人と最も多く、そのなかで、約28万人が永住権を保有している(日本政府統計, 2020)。近年の在日中国人には若年化と高学歴化が見られ、東京などの大都市に居住し、留学と就職活動を経て、高度人材として日本で暮らす者が多い(鄭, 2014; 朱, 1999, 2003)。さらに、高度専門職の在留資格の新設、永住権取得所要年数の短縮などの施策が在日中国人の若者の日本での長期滞在を促している(宋, 2019)。

在日中国人の若者は移住目的が多様化し、血縁やエスニック集団、華僑華人団体の重要性が相対的に薄れ、友人関係、趣味活動を中心としたパーソナル・ネットワークが優勢になりつつあると報告されている(莫, 1993; 巴, 2012)。一方で日中国交正常化(1972年)以前に来日した中国人(老華僑)との間で分断が生じ、在日中国人研究を困難にしている(宋, 2019)。筆者は在日中国人の若者を取り巻くネットワークに着目することで、在日中国人の若者の研究における困難さをより多面的な視点を持って乗り越えることを試みる。在日中国人の若者はエスニック・ネットワークを完全に離脱したのか、保持しているとしたら、どのように位置付け、関わっているのかは明らかにされていない。筆者はそれらの疑問を解明することを研究の目的とし、在日温州人社会の歴史的連続性と構成の多様性という理由から、在日温州人の若者を研究対象とした。温州人にとって日本は重要な移民先の1つであり、従来から「在日温州同郷会」「在日温州商会」などの華僑華人団体が数多く創立し現在まで存続している。しかし、それらの団体は近年どのように変容したか、在日温州人の若者の参加有無などは示されていない。また、在日温州人の若者の移民ルートや定住様式、生活実態、関わるネットワークなどをテーマとする研究は管見の限り見当たらない。したがって、本研究は在日温州人の若者のエスニック・ネットワークとの関わり方を切り口として、日本語、中国語、英語の文献研究と参与観察及びインタビュー調査の研究方法を用いて、在日中国人の若者が持つネットワークの変容を考察する。

まず、在日中国人のエスニック集団形成の背景に焦点を当てる。日中両国の政策および両国をめぐる国際関係等の制約により、在日中国人の経済活動や生活上の相互扶助と親睦を趣旨に、「商会」「同郷会」といった実体がある組織が数多く創立された。日中国交正常化から現在まで、それらの組織の機能は多様化しているものの、在日中国人の若者は参加に消極的な傾向が見られる。なぜなら、在日中国人の若者の移住目的や生活様式が多様化し居住地も分散し、特定の集団より個人間で展開するネットワークが活発になりつつあり、WeChatの普及によりインターネット上のネットワークへ移行しているなどが理由として考えられる。故に、在日中国人の若者が置かれた環境及び彼・彼女らを取り巻くネットワークは可視化しにくい状態になり、これまでと異なった研究視点が求められるであろう。

筆者は在日温州人の若者たちが東京都の温州レストランをベースに交流している実態をエスニック・ネットワークの観点から明らかにするため、参与観察を行った。そのエスニック・ネットワークにおいて、在日温州人の若者たちは温州レストランを第1拠点、そこから派生した温州レストランのWeChatのオンライングループを第2拠点として、オンラインでイベントを企画し、オフラインで集まっている。筆者は2020年秋から、2週間に1回のペースで温州レストランを訪ね、オンラインのWeChatグループ、オフラインイベントでの参与観察に基づき、5つのイベントを記録及び考察した。また、筆者は一年間に渡り調査対象者たちとラポールを構築した上で、温州レストランの経営者一家3人、在日温州人の若者5人に長時間の半構造化インタビューを実施した。その結果、在日温州人の若者が多様な社会的ネットワークを持つ中でエスニック・ネットワークをどのように捉えているのか、その位置付け及び役割をあぶり出した。

参与観察により明らかになったのは、在日温州人の若者は従来の華僑華人団体からはある程度離れているものの、「脱エスニック」意識を持っておらず、在日中国人として日本で暮らす需要に合わせて、温州レストランを居場所としてオフラインとオンラインで併存するエスニック・ネットワークを構築していることであった。首都圏在住の温州人の増加と共に故郷料理に対するニーズが増え、また彼・彼女らがこの温州レストランを SNS で宣伝・拡散することにより、店の人気が高まった。さらに、レストランの経営者が客の好みに合わせて味を調整してくれるところから、中国他地域の出身者も故郷の雰囲気味わえる居場所として通うようになった。こうして徐々に在日中国人の若者の客が増えていく過程で、温州レストランの WeChat グループが作られ、メンバーの拡大と共に、交流やオフラインイベントも活発になってきた。

参与観察で得られたデータは半構造化インタビューを通じて再確認できた。すなわち、在日温州人の若者は平日の仕事を通して日本社会に溶け込み、日本人と良好な人間関係を築いているが、休日には、中国語を話したり、故郷の料理を食べたり、中国のゲームをしたり、中国人としてのアイデンティティを解放し確認し取り戻すかのようにオフライン活動に参加する。彼・彼女らは日本での暮らしの中、情報収集、交流、ネットワーキングなどのニーズに応じて、「中国内の親友」「在日中国人の知人」「日本での学生時代の知り合い」「日本の職場の同僚」「在日温州人の同郷人グループ」「在日中国人の趣味グループ」「温州レストランのグループ」といった多様なネットワークを築き、使い分けている。

結論として、在日温州人の若者はホスト社会集団に無理をしてまで入り込もうとせず、在日中国人のエスニック集団に依存することもなく、両方と「ゆるいつながり」を維持していることが言える。本研究では、在日温州人の若者はホスト社会集団との関係を構築し高い適応力を見せ、自文化の維持も重視し、これまでの在日中国人の研究で示された「商会」などを取り巻くエスニック・ネットワークとは異なった形でのエスニック・ネットワークを保持していることが明らかにした。

## 参考文献

朱 慧 玲(1999)『華僑社会の変貌とその将来』 日本僑報社

--- (2003)『日本華僑華人社会の変遷—日日中国交正常化以後を中心に—』 日本僑報社

宋 弘揚(2019)「東京大都市圏における若年中国人移住の動機と社会関係構築の様相」 日本地理学会発表要旨集 2019s(0), 52

鄭 楽静 (2014)『日本温州籍华侨华人社会变迁研究』北京科学出版社

巴 芳(2012)「在日中国社会におけるネットワークとアイデンティティの変容：若者たちのサッカークラブを事例として」 日中社会学研究 (20), 95-104

莫 邦富(1993)『新華僑—世界経済を席捲するチャイナ・ドラゴン』河出書房新社